

宇野千代全集

第十一卷

宇野千代全集

第十一卷

宇野千代全集 第十一卷

昭和五十三年五月十日印刷

昭和五十三年五月二十日発行

著者 宇野千代

発行者 高梨 茂

印刷者 山元正宜

発行人 中央公論社

東京都中央区京橋二一八一七

電話〇三(五六一)五九二一

振替東京二一三四

検印廃止

©一九七八

隨筆
三

目次

随筆 Ⅰ

日記抄

7

女の日記

13

那須日記

51

或る日記

61

随筆 Ⅳ

三好達治さんへの手紙

195

青山二郎さんへの手紙

205

高田博厚さんへの手紙

中里恒子さんへの手紙

あとがき

書誌

332 331 225 215

隨筆

Ⅲ

日記抄

——日

この家へ越して来て四五日になる。ここへ来る前に、私はそのことを考えていた。この家が、むかし自分のいたことのある家だということで、軽薄な迷信らしいものの考え方にとり憑かれないようにと。それは馬鹿なことでもあるが、また意味のないことだからである。私はこの感傷的でない自分の気持を当然だと思い、そして安堵した。殆ど、この二十年の間の日時が、何の無理もなく過ぎていたような感じであるのを、そして私が再びここに住むようになったのは単なる偶然であるように感じているのを、喜んだ。

昨日、組長さんのところへ挨拶に行った。組長さんはあの家、というので、私はおや、と思つた。そして今朝、その若い息子である時雄さんが、お父さんの代理と言って防空壕を見に来た。時雄さんには殆ど幼な顔が残っていない。あ、時雄さんだと分るのと同時に、突然、ああこの顔、と、私はもう一つの別の顔を思い出した。齡は幾つだろうか、二十三か、四か。あの昔の別の顔

と同じ年頃だ。私は平静ではない自分を感じる。自分の青春が去った、というのは、こういう感じであろうか。青春がどういう形で再び来るのか、それを見た、というのであろうか。しかし私はこの考え方で、自分が迷信に陥っているのだとは決して思わない。ただ、あるがままにこの感じを受入れていようと思う。

——日

前に書いた同じことが、半月にもならない今日では、もう、それは日常茶飯事の感情になって了った。二十年間、心の中に眠っていた筈と思っていたことが、ただの半月で消えて了ったのに自分乍ら驚く。いや、驚いてさえもない。時というものは、そういうものである。

——日

田舎の家へ来てから一週間になる。ここでの生活は、私にとっては始めての経験である。一日の家の中のことは誰かがしている。私はその大切な心棒になっていくのではなく、ほんの小さい、些細なことを足して、それで一日が終る。ほかの人の間に挟まって暮している。こういうことは、私のこれまでの生活には一度もなかった。自分の考えで自分がし始めるのではなく、ほかの人が考えてしているその通りのことを、自分もする。そういう生活である。女にとっては普通のこと

になっているこういう生活が、私には始めての経験なのだ。人のしている通りに心も体も柔かく動かすということの、思いのほかに愉しいのに気がつく。

自分ではやりたいと思っていないこと、または好きではない仕事をするときには、さもしくて堪らないことをでもするようにいそいそとしてすること。まず、自分の手足をだますこと。その中に、ほんとうに愉しい仕事をしているような気持ちになる。しても無益だと思ふこと、詰らないと思ふこと、或は難しくてとても出来そうにはないと思ふこと、そういう仕事をするときも同じである。いそいそと、さも愉しそうに、楽々と見えるようにやること。努力するというのは、私流に言ふと、こういう方法のことである。

——日

エスペラント語では小説は書けない、とあの人が言う。ドストエフスキー、ゲーテ、シェークスピアその他。その国の地面にはつきりと立ち、その山川草木とともに生きている人間でなくて、どうしてもものを書くなどということが出来よう。戦争中、私もラジオで聞いた。ある俳優の、前線にいる肉親に呼びかける言葉というのを、いまでも思い出す。「兄^{あに}さん！」とその俳優は呼んだ。上方訛りの、あの生々しい、肉体を持った言葉の中にある、あの力。

この国が失われると人々の言っている日、ああ、何と、床の間においてあるお弓と尾上の人形

の、あの動かない顔の中にあるその日本。私にはこの頃ほど日本という国のはっきりと感じられる時はないように思う。

あの日から二三日経ったある晩、私はひとりで外へ出た。畑の上に月が出ていた。大きな、まるい月だ。「ああ、お月さま、」と私は呟いた。何にも変っていない、ということは、何という異様なことであろう。私にはよく分らない。でも、日本はこの通りちゃんとあるではないか、とそう思う。

——日

私はふいに眼がさめたように、ああ、このことだ、と思う。いままで人に聞いたり、もので読んだりしたことが、いや自分で書いたりもしていたことが、あれはこういうことであつたのかと、ふいに眼がさめたように、まるで種明しの種を見たように、まざまざと分る。日数にすれば七日か十日だ。この七日か十日の間の、いわば歴史というものの圧縮が、私にもまざまざと感じられる。どういふ世の中も、私たちのような仕事を持つものにとっては同じである。生き易いとか、生き難いとか言うことも、その日その時の、単なる感じに過ぎないからだ。

——日

弟が死んだ。それは苦しい病氣であつた。苦しい、殺してくれ、頼む、と幾度も言つた。本人が頼むのだから、殺しても決して罪ではない、と繰返して言つた。私は病室についていて、何を言ふのかと思つた。弟のような男が、こんなとき、こんな科白のような言葉で言ふ。(いや、苦しいからこそ、こういう科白のような言葉しか言えなかつたのだ。) 私は弟の死後しばらく、心をしめつけられるようになり乍らその時のことを思い出す。私はいろいろのことがあつて、つまり、いま死ぬという人間のそばにいつまでもじつと坐つてゐることが出来ない。いま人が死ぬというのに、私はその人間の苦しみを見てゐることが出来ない。この場所から逃れたい、と私は思う。私は不機嫌になつて、何を言ふの、生きるのは人間の義務じゃアないか、などと言つた。それはどういふ意味の言葉か自分にも分らない、言葉の眞の意味とは全く關係のない、私はお前に腹を立ててゐるよ、というだけの言葉でしかないのである。あれは死ぬ五分前であつた。「足が痺れる、」と弟が言つた。早く、早く、早く湿布をしてくれ。湿布をして足を温めてくれ、だんだん足が冷たくなる、と言ふ。もう死ぬ、熱い手拭を、そうだ、ゲートル捲きに、筒まきに、と言ふ。ほんとうに死ぬだろうか。私はそれを信じなかつた。そして、熱いタオルを急いで病人の足に捲きつけ乍ら、ゲートル捲きに、筒まきに、などとは、何という奇妙な表現だろう、と思つた。すると突然、それは死の一秒前、突然、静かな顔になる。あの病苦と死への抵抗とが、ふいに病人の顔から消える。さつと風が吹いて木の葉が散るように。死の覚悟などというものも不要

である。平凡な人間はこうして死ぬ。自然というものの力は無慈悲だなぞと、誰が言えよう。

病院の中で通夜をした。こういう時であるから、文字通り何にもない。遺骸は浴衣を着て、紐を結んでいる。病院そのものが焼けているので、遺骸をおいた部屋は裸で、窓ガラスもない。電気がつかない。私は誰もまだここに来ない間、死者とただ二人きりで坐っていた。ついさっき死者が茶を呑んだ茶碗に土を盛り、香を立てた。風が吹いて蠟燭が消えそうになる。骨だけの窓の戸がはためく。眼をあげると、たしかに一望の焼野原に、思いもかけず明るい月が出ているのだ。

女の日記

——日

傷口は突つかないようにすることが肝腎である。もしあのことが傷であるとすれば。突ついて
いる間は、傷はいつまでも生きている。だが平静でいられると言うことは判断を間違えないよう
にすることだろうか。いや、平静でいられるように、上手に判断を間違えることだ。このことに
就いて私はもう屈辱は感じていない。私は自分を上手に馴らすことが出来るような気がする。人
間はと言う習慣にも馴れるものだから。

世間の習慣を尊敬しなければならない。

——日

人は誰でも、言葉と身振りを過信している。それによって心の中にあるものをそのまま表現し
ている、と決めている。だが、実際には、言葉も身振りももっと微妙でもっと変転自在である。

人間はそれによって自分の好きな状態に自分をおくことも出来る。愛もそれによって生れる。勿論憎悪も。私はこの二三日、ただのちょっとした「勇氣」によって、或る言葉と身振りとに身を任せ、それによって自分の心を或る一つの方向に押し向けることに成功した。私にとってはこれは大切な経験になる。

嘘吐きとは二つの別の真実を同時に別々の場所で見せる人間のことだ、とも言える。また実際、どんなに嘘らしい話でも信じたいと思っている間は信じられる。こう言うとき、人は相手の話を確かに、何だかはつきりしないと確かにそう感じているのに、そのまま相手の言葉を鵜呑みに信じる。信じていたいからだ。私はそう言う人間が幸福になり得ている例を知っている。これは決して欺されたと言うことにはならない。

——日

その人に会った。私は笑いかけても好いのだし、睨んでやっても好い。どっちでも好いのに、やっぱり笑いかけなかった。人間は前からちゃんと決めている感情に支配される。いつでも、そのままで反対のことも出来る、と言うことを私は知っている必要がある。

——日